

深田久彌●山の文学全集

ヒマラヤの高峰

80
ア

監修

小林秀雄

井上靖

三田幸夫

今西錦司

朝日新聞社

深田久彌●山の文学全集 VII

ヒマラヤの高峰（上）



深田久彌・山の文学全集 VII

ヒマラヤの高峰（上）

全十二巻・第九回配本

一〇〇円

発行 昭和四十九年十一月二十一日

著者 深田 久彌

著作権者 深田志げ子

装幀 原 弘

発行者 岡見 璋

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

© Shigeko Fukada 1974

深田久彌・山の文学全集

VII

目次

ヒマラヤの高峰（上）……………セ

ヒマラヤ概観

九

エヴェレスト

一七

ケー・トウ

一八

カンチエンジュンガ

二〇

ローツェ

二六

マカルー

二八

ダウラギリⅠ

三〇

マナスル

三二

チョ・オユ

三七

ナンガ・パルバット

三九

アンナプルナー

四一

ヒドゥン・ピーク

四四

ブロード・ピーク

ガッシャブルムⅡ

ゴザインタン

ヌン

スターリン峰

チョモラーリ

アピ

ケダルナート

シア・カンリ

ムスターグ・アタ

ラカポシ

ドゥナギリ

テント・ピーク

テイリチ・ミール

マナ・ピーク

サセル・カンリ

カメット

カプルー

一七四

一八三

一八七

一九七

二〇六

二二三

二二三

二四三

二五〇

二五八

二七三

二六九

二〇二

三〇九

三一九

三三六

三六六

三六二

ムスターグ・タワー

ミニヤ・コンカ

アンナプルナⅣ

ナンダ・デヴィ

レーニン峰

パウフンリ

プモ・リ

マッシャブルム

マチャプチャレ

深田久彌・人と作品（七）
解題

三七五

三八六

三九七

四〇七

四一六

四二四

四三七

四四六

四七五

近藤 信行 …… 四八三
中馬 敏隆 …… 四九〇

ヒマラヤの高峰（上）

ヒマラヤ概観

巻頭についている概観とか概説とかいうもののほど、読者にとって無味乾燥なものはない。しかし大体の概念が頭に入っていないと本文の理解が十分に行き届かなくなるから、厄介でもこの関門は通過しなければならぬ。

ヒマラヤという言葉は、サンスクリット語の複合語で、ヒマ (Hima) は雪、アラヤ (Arya) は居所、つまり、「雪の居所」という意である。正しく読めばヒマラーヤ (Himalaya) である。インドの平原から眺めて、北方に輝く気高い雪の峰を、素朴に「雪の居所」と呼んだのは、信仰深い住民の当を得た名付けかたといえよう。英語では Himalaya と書き、第二と第三のシラブルにアクセントをおき、最後の *ya* は発音されないこともある。ネパールでは、ある人たちはヒマール (Himal) と呼んでいる。どうしてヒマラヤができたかという科学的な問題は、私の最も不得手とするところだ。しかし、省くわけにも

いくまい。ごく大まかな説明で許していただく。

大昔、ヒマラヤはなかった。その代わりに、インドとチベットの間に浅い海が横たわっていた。ところがチベットから非常に大きい力が動いてきて、それがインドの古い堅い地殻でせき止められたため、その圧力で中間の海の沈積物が盛り上がり、それが現在のような大山脈となった。だから今日でもヒマラヤの六〇〇〇メートルの高地に、大昔の海の生物が化石になって発見される。世界中の大山脈の中で、ヒマラヤが一番高いが、また一番年齢が若い。今もお、ヒマラヤの枢軸は盛りあがりつつあるという。最高峰エヴェレストの八八四〇メートルという標高は、一八四九～五〇年の測定の結果だが、最近ではそれより高く、八八四八メートルとなっている。

この数字の増加は、エヴェレストの高さの自然成長を示している。ヒマラヤは最後の氷河時代以来、つまり約二万年このかた、一五〇〇～二〇〇〇メートル盛り上がったという数字が出るそうで、これを計算すると一年約七・五～一〇センチの増長となる。いずれにせよヒマラヤが年々高くなりつつあるということは、われわれ山岳宗徒にとっては、思うだけでもたのしい現象である。

普通ヒマラヤと呼ばれている山脈は、西はインダス河

の大曲がりから、東はブラマプトラ河の大曲がりに至るまで、約二五〇〇キロにわたる大きな弧を描いている。

この二つの河は、大山脈が盛り上がったため、その両側を大きく迂回して海に注ぐようになった。またインドからチベットへ通じる幾条かの要路は、深い溪谷を通過する。その道がヒマラヤの大きな壁を横断している地形に、私も素人はおどろくが、これらの河流も、徐々にヒマラヤが盛り上がる間に、その河床を切り拓いていったのである。

ヒマラヤの大きさを判りやすく示すために比較をとると、もしその西端をロンドンにおけば、東端はモスクワに達する。わが国でいえば、ほぼ青森から鹿児島に及ぶ距離になる。東西に延びたこの大山脈を屏風にして、北と南では、気候や植物が全く趣を異にするのは当然であって、インド側は湿度に富み植物が繁茂しているが、チベット側は乾燥して不毛の地が多い。ヒマラヤ登山記の大部分は、まずインドの暑熱にうだるところから始まる。それから熱帯植物の群がる湿潤なテライ地帯を突きぬけて、ようやく爽涼の気の動いている高地に着いてホッとする。そこからヒマラヤの山脈に近づくと、もう住民はチベット系になる。彼等は山脈上の高い峠や、ある

いは山脈を横切る深い溪谷を辿って、こちら側に侵入してきたのである。

ヒマラヤは便宜上その地形によって幾つかに区分されている。その区分の仕方は人によってまちまちであるが、私は次の六つに分けるのを適当と思う。さらにその各区分は幾つかに分けられるが、煩瑣になるからそれは省略する。まず東の方から始めよう。

アッサム・ヒマラヤ

これはヒマラヤの一番東の地域で、ブラマプトラ河の大曲がりからブータン東境までの山脈をいう。ヒマラヤの中で一番知られていない地であって、その理由は、住民の部落と山脈との間に幅の広い密林の帯があり、山に取りつくまでが容易でなかったからである。その密林帯には首狩りの蛮人が住んでいると噂された（事實は平和な種族であった）。その上、ベンガル湾からのモンスーンを受けるもっとも近距離にあるので、極端に雨が多い。そんないろいろの悪条件のため、この地域の山に登ろうとする人は極めて少なかった。登頂された山はまだ一つもない。試登されたものさえカンドゥ（七〇八九メートル）だけだが、それも頂上まではほど遠かった。最高峰はブ

ラマプトラ河に臨むナムチャ・バルワ(七七五六メートル)であって、ヒマラヤ山脈の東端を成している。この山が発見されたのは一九一二年であつたが、その翌年、ブラマプトラの対岸にギャラ・ペリ(七一五〇メートル)が発見された。ヒマラヤ山脈は河を越えてまだ続いていたのである。というよりも、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリの間をブラマプトラ河が深い溪谷をなして横切つていたのである。探検の十分でないこの地域のことだから、まだどんな大きな山が発見されるかわかつたものではない。

ブータン・ヒマラヤ

ブータンの北辺、チベットとの国境を成す山脈であつて、ここもアッサム・ヒマラヤと同様、よく知られていない。登頂されたのはチョモラリ(七三二四メートル)だけだが、これはインドからチベットへ通じる主要道路の近くにあつたので、早くから眼をつけられていたためである。しかしそのチョモラリから東へ続く山脈へ分け入った人は極めて少ない。クーラ・カンリ(七五五四メートル)その他の七〇〇メートル峰が幾つかあるが、ただ位置と高さが知られているだけで、それに登ろうと

試みた人はまだない。

ヒマラヤは東へ近づくほど、樹木が繁茂し、山容もアルプス的な尖峰が少なくなり、ドッシリと大きい東洋風になる。ブータン、アッサムには日本人好みの山が多い。日本の登山家にとっては、絶好の処女地帯に思われるのだが、現在のところ入国がはなはだ困難であるのは残念である。早くその困難が無くなればいい。

ブータン・ヒマラヤをアッサム・ヒマラヤに含めてしまふ人もあるが、その地域の広さからしても、私は二つに分けた方がいいと思う。登山的にはもっとも未開の地だけに、それに対する憧れと夢は大きい。

シッキム・ヒマラヤ

ヒマラヤの区分の中では一番小さな区域であつて、ブータンとネパールの中間にあるシッキム公国の三方を取り囲む山脈をさす。インドからチベットに行く通路にあたるので、イギリスがいち早く勢力を延ばして、その支配権を握つたところである。したがって全ヒマラヤ中에서도よく知られ、もっとも近づきやすかつたのが、このシッキム・ヒマラヤである。首都ガントクまでは車が行き、そこから数日の行程でやすやすとヒマラヤ山中の人とな

ることができた。山地旅行者のために、気持のよい宿泊小屋ハイツの設備もあり、よく探査された地図も整っていた。ところが第二次大戦後の政治的転換で、イギリスの統治から脱して、インド連合の一つとなり、現在では一般的には入国が困難となった。シッキム・ヒマラヤの盟主はカンチエンジュンガで、それを中心に幾多の七〇〇〇メートル以上の衛星峰が立ち並び、その中にはジャヌー（七七二〇メートル）のような容貌の怪異な山もあれば「世界で一番美しい山」といわれたシニオルチュー（六八八一メートル）のような秀麗な山もある。

ネパール・ヒマラヤ

ネパールの北方を劃する山脈であつて、ヒマラヤの全延長の約三分の一を占め、八〇〇〇メートル以上の高峰が七座までここに集まっている。一九四九年のネパールの開国は、全世界のヒマヤニストにとって、宝の山が開かれたような喜びであつた。ネパール・ヒマラヤこそヒマラヤのもっとも豪華な部分である。しかも長い間の鎖国のため、そのほとんどが未知の境であつた。いたる所に処女峰あり、戦後各国の登山隊は争つてその八〇〇〇メートル峰にいどんだ。現在最も入国が容易なので、

ヒマラヤ遠征の大半はこの地域の山が選ばれる。ケニス・メースンはネパール・ヒマラヤをその水系によつてさらに三分し、コシ地区、ガンダキ地区、カルナリ地区に区分している。

ガルワール（クマウン）・ヒマラヤ

ネパールの西国境から、インドス河の一支流サトレジ河までの区域をいう。この地域を横切るヒマラヤ主軸の北方に、支脈ザスカール山脈が延びていて、これがチベットとインドの国境をなしている。ヒマラヤの中でも比較的入山がやさしかったため、早くから開けた土地で、ほとんど全体にわたつて測量され、正確な地図が作られている。八〇〇〇メートル峰こそないが、登りがいのある六〇〇〇、七〇〇〇の山に多く恵まれており、戦前もつとも登山隊の賑わつた区域である。最高峰はナンダ・デヴィ（七八一七メートル）で、わが国最初のヒマラヤ遠征であつた立教隊のナンダ・コット（六八六七メートル）もここにある。主な山は登りつくされた感があるが、それでもテイルスリ（七〇七四メートル）その他の未登峰がいくつか残っている。ただ近年入国が政治的に困難になつたのは残念である。

パンジャブ・ヒマラヤ

パンジャブ・ヒマラヤはサトレジ河からインダス本流の大曲がりまでにわたる山脈をさす。パンジャブとは「五つの河」の意で、インダス河の五大支流の中の四つ——ジェルム、チェナブ、ラヴィ、ビース——が、この地域の中を流れている。ここの山脈上の二つの大きな山は、ヌン・クンとナンガ・バルバットである。ナンガ・バルバットはネパールおよびカラコルム以外にある唯一の八〇〇〇メートル峰で、ヒマラヤ山脈西端の最後の王座としてその偉容を誇っている。この山とヌン・クンを繋ぐ山脈上には、六〇〇〇メートルを超える山すらない。しかしカシミールの首都スリナガルから近かったので、イギリスの統治時代には、登山家や旅行家や狩猟家が多くこの地域へ手軽に入った。現在は中国とインドの国境紛争のため、一部を除いては入国至難である。

以上が、厳正な意味でヒマラヤと呼ばれる地域であるが、そのほかにカラコルムがある。カラコルムをヒマラヤに入れるかどうかについては多くの議論があった。ある人はこの両山脈がインダス河上流によって（正確に言えばその支流のシオーク河によって）はつきり分かれて

いるので、別個の取扱いをする。しかしまたある人は、ヒマラヤとカラコルムとは地理学的に見ても形態学的に見てもその差異はごくわずかで、両者を分ける必要はないと主張している。それはいずれにしても、現在広義にヒマラヤという時には、カラコルムも含めている。われわれが通常ヒマラヤ遠征という時には、カラコルムも入っている。各国にあるヒマラヤ委員会はもちろんこれらを総称している。

カラコルムから西へ続くヒンズークシ山脈をも、広義のヒマラヤの中へ含めていいだろう。私の「ヒマラヤの高峰」はそれだけではなく、さらにバミール、天山山脈、コンロン山脈、大雪山脈をも包含する。つまり中央アジアの高峰のすべてを網羅したい所存である。地球上には、この中央アジアの高地を除くと、七〇〇〇メートルを超える山は一つもない。ところがここにはそれが無数に存在する。しかも未探検の地がまだまだたくさん残っている。もしヒマラヤという言葉を原義通り「雪の居所」と取れば、これらをすべて含んでいいはずである。ヒマラヤに関する唯一の機関誌“Himalayan Journal”は、アジアの高峰全体を対象としている。

カラコルム

カラコルムという名は、主山脈から東に離れたところにあるカラコルム・パスからきた。トルコ語族の言葉で、カラは黒、コルムは小石の意で、峠の上には実際黒い石層が転がっていたのでこう名づけられた。しかしこの山脈には昔からムス・ターグという名称があった。ムスは氷、ターグは山の意である。その名の示す通り、ここには七六〇〇メートルを超える氷雪の山が、ずらりと十九座も並んでいて、その中の四座は八〇〇〇メートル以上である。その上すばらしいことには、大氷河が五つもある。東からあげると、シアチェン（七二キロ）、バルトロ（五八キロ）、ピアフォ（五九キロ）、ヒスパ（六一キロ）、バトゥラ（五八キロ）で、これら世界で有数の氷河が長蛇のごとく流れ、その両側に氷雪の鋭峰が並び立っている壯観は、山男の心を揺すぶらずにはおかない。カラコルムはネパールとともに、ヒマラヤ信者の憧憬の地と言っているだろう。カラコルムかカラコルムか。いろいろ議論があるが、私はデイルンフルトやロングスタッフの説に従って、カラコルムを採ることにした。メースンはカラコラムと書いている。

ヒンズークシ山脈

ヒンドウ・クシュと書いた方がより正確かも知れないが、一般の常例に従ってヒンズークシとしておこう。ヒンドウはインドの意、クシュは連山の意だという。カラコルムから西へ伸びた山脈で、その境界はバトゥラ氷河の源頭とされている。そこはパキスタンとアフガニスタンの国境でもある。アフガニスタンの北部をこの山脈は西へ向かって走り、その末は幾つかの支脈に分岐して次第にその高さを減じる。中央アジアの高地の西の果てで、もうこれから先には七〇〇〇メートルの山は無くなる。

ヒンズークシ山脈には七〇〇〇メートル以上の山は、ティリチ・ミール（七七〇〇メートル）を最高として、約十座数えられる。その主な峰は戦後各国の登山隊によって登頂された。それらの山については本書のそれぞれの項に詳しく書いてある。

アフガニスタンの首都カーブルからこの山脈の低部を越えて北側に出、そこに流れるアム・ダリア（オクサス河）に沿って新疆省へ抜けるルートは、古くからシルクロードとして有名である。しかしソヴェトとの接触地な